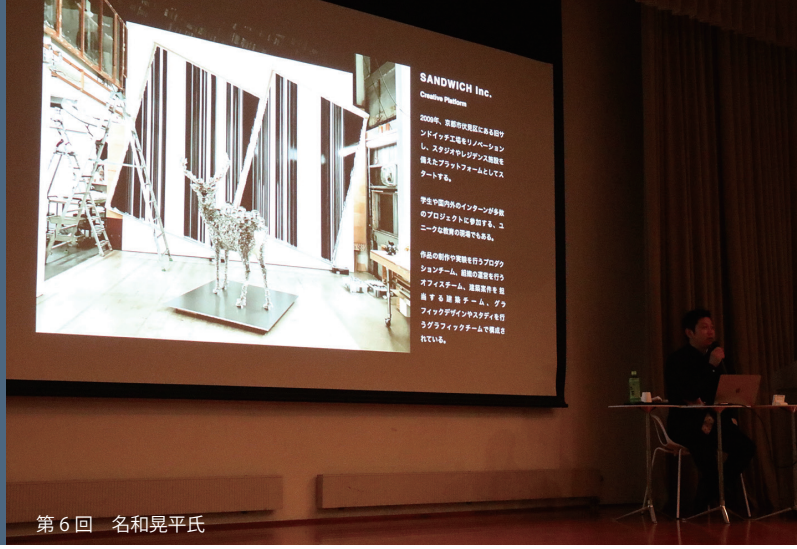
Project class

平成 29 年度プロジェクト授業
「芸術文化探求」

富山大学芸術文化学部教授　武山　良三



第６回　名和晃平氏

「芸術文化探求」は、芸術文化の本質や役割を探るため平成27年度から実施しているプロジェクト授業です。講師は学部の教育コースである美術、工芸、デザイン、建築、キュレーションを活動分野としている方を基本に選考していますが、創造することの根本は表現の形態が異なっても共通するのではないかと考え、他のジャンルからも招聘するようにしています。平成29年度は、TVに「お笑い番組」というジャンルをつくったと評価される澤田隆治氏や、季節感にこだわった菓子づくりで世界的に活躍されている和菓子職人・水上勉氏を招きました。

履修登録した学生は13名に留まり、7回を平均して11.1名の出席になりましたが、未履修生が43.3名、教職員が10.3名、一般参加19.7名あり、1回当たり84.4名が聴講しました。授業の満足度についてアンケートを行い、「満足」「やや満足」「やや不満足」「不満足」の4尺度で尋ねたところ、「満足」と「やや満足」を合わせた満足側の回答が100％になりました。一般参加者からは、「多様なゲストが毎回楽しみです」、「このような授業を公開してもらえるのは、非常にありがたいです。勉強になるので続けてもらいたいです」など、一般参加できることを喜び、継続して欲しい旨のコメントがありました。

以下に筆者が講義で印象に残った内容の一部をまとめました。講師陣にはあらかじめ、「専門分野に特化するのではなく、芸術文化を俯瞰した大きな観点から語って欲しい」との依頼をしていました。講師陣が本授業の企画意図を理解して、話を進めてくれたことがわかるメモ書きとなりました。

第1回「造る喜こび」講師：香山 壽夫氏

・人間社会の発展は、「ことば」と「ものをつくる」ことで築かれた。つくることが人をつくってきたとも言えるが、現代社会では細分化が進み、ものづくりが見えなくなっていることが問題である。ものづくりを通して人に出会い、人と関わることで仕事が成り立つ。

第2回「笑いとテレビ文化」講師：澤田 隆治氏

・テレビ番組は今日、テレビ局ではつくっていない。番組をつくるプロダクションによって行われている。アメリカでは従来からこのスタイルで、日本もようやく放送会社とソフト会社の分業が定着した。
・BSが普及するとローカル局は不要になる。ケーブル局は今まで以上に地元に密着した、リアルな番組作りが求められる。
・お笑い番組からコメディアンが育ち、キャスターになり、やがて政治家にまでなった。お笑いには、その中に時代を捉える目線が不可欠である。

第3回「適切なデザイン～デザインを過信しない」
講師：居山 浩二氏

・依頼された部分だけを捉えるのではなく、全体を俯瞰して必要と思われることを提案していくべきである。
・事業だけでなく、文化としての価値をもたらすことが求められる。
・プレゼンテーションは、「説得」ではなく「納得」してもらう行為である。
・デザインを過信してはいけない。常に事実を観察し、客観的に捉え、できる範囲を明確にする必要がある。

第4回「季節の美」講師：水上 力氏

・和菓子は明治以降洋菓子と区別するためにそう呼ばれるようになっただけで、私がつくっているものは菓子である。
・京都の菓子は、皇族へ献上する中で抽象を重んじてきた。一方、江戸の菓子は、将軍家に献上する中で具象表現を取り入れてきた。
・和菓子は五感で食べるものであるが、とりわけ季節感が重要。季節感を失っている現代社会で、それを思い起こすきっかけになればとの思いで、季節にこだわった菓子をつくっている。
・日本文化はすっかり西洋化してしまったが、和菓子には世界に向けた発信力がある。

第４回　水上 力氏

第１回　香山壽夫氏

第5回「うつわのことわり」講師：赤木 明登氏

・数多くの「写し」の器をつくっているが、それはコピーではない。工程のあらゆる場面で選択肢があり、それらを経てつくられるものはオリジナルである。
・多様に生まれるものの中からベストを探し出すことが重要。
・縁のある漆器は、縁に強度を持たせる必要があったためつくられた。それは金属器の名残であり、その金属器は縄文時代の土器の形を模している。形は、脈々と受け継がれている。

第6回「感性と"Cell"」講師：名和 晃平氏

・「Cell」とは「細胞」のことであり、それこそが造形の最小単位である。この単位を、繋げたり、変形したりするコンセプト（キーワード）を設定して作品づくりを行っている。
・絵の具を垂らすなど、アナログな手法を大がかりなスケールで行う一方、コンピュータを用いて、仮想空間上で造形した作品を現実化させるなどの手法も取り入れている。アナログとデジタルの融合が重要。
・かつてのサンドイッチ工場をリノベーションして、若きクリエーター達と共同でアトリエを運営している。大型作品はひとりではつくれない。様々な能力を持った人々とのコラボレーションが必要だ。

第7回「現代美術と地域の伝統」講師：鷲田 めるろ氏

・ヴェネチアビエンナーレ日本館の作品キュレーションなど、大規模な展示の作家選定は、小さな展覧会等の蓄積があったから行えた。
・作家を呼んでくるだけでなく、一緒に作品づくりを行っていくような姿勢が必要だ。
・岩崎貴宏「逆さにすれば、森」の作品を事例に、展示する場へのこだわり、素材を活かした緻密な造形作業などについて解説があった。

■ 平成29年度

第1回　平成29年10月25日（水）
演題：「造る喜こび」
講師：香山 壽夫氏
（建築家）

第2回　平成29年10月30日（火）
演題：「笑いとテレビ文化」
講師：澤田 隆治氏
（株式会社 テレビランド社長）

第3回　平成29年11月10日（金）
演題：「適切なデザイン
～デザインを過信しない」
講師：居山 浩二氏
（アートディレクター）

第4回　平成29年11月13日（月）
演題：「季節の美」
講師：水上 力氏
（和菓子職人・一幸庵店主）

第5回　平成29年11月21日（火）
演題：「うつわのことわり」
講師：赤木 明登氏
（漆芸家）

第6回　平成29年12月5日（火）
演題：「感性と"Cell"」
講師：名和 晃平氏
（彫刻家・京都造形芸術大学教授）

第7回　平成29年12月19日（火）
演題：「現代美術と地域の伝統」
講師：鷲田 めるろ氏
（金沢21世紀美術館キュレーター）